

# 外来語か否かの判定調査結果報告

## Results of an Investigation to Determine Whether a Word is Borrowed

### —29 のカタカナ表記語を対象に— Targeting 29 Words Expressed in Katakana

増地 ひとみ  
Hitomi MASUJI

キーワード：外来語、カタカナ表記語、語種の判定、アンケート調査

#### 1. 本稿の目的

日本語の文字による創作物においては、外来語を使用することで新しさ、珍しさを演出することが行われてきた<sup>1)</sup>。つまり、外来語をどの程度テキストに混入させるかによって、創作物の印象は変化する。ただし、これは外来語が「外来語」として認識されることによって成立する表現手法である。そして、外来語が外来語と認識される大きな要因は、カタカナで書かれていることであるはずである。なぜなら、現代日本語の文字言語において使用される4種類の文字種（漢字・ひらがな・カタカナ・Alphabet）にはどのような語を表記するかという点で大まかな役割分担があり、外来語の表記を担うのはカタカナだからである。カタカナの主要な役割は、外来語を表記することである。

一方で、外来語以外（非外来語）をカタカナで表記した「マンガ」のような例も実際には観察される。そのため、なぜ非外来語がカタカナで表記されるのかが、数々の先行研究によって検討されてきた。筆者もそれに取り組んできており、いくつかの要因を増地（2013）等で新たに指摘するとともに、2019年に発表した「非外来語のカタカナ表記」研究の現状と今後の展望」でこれまでの先行研究を総括し、指摘されてきた要因を分類して一覧で示すことも行った。

ここで一つの疑問が生じた。〈カタカナの主要な役割は、外来語を表記すること〉であるとの前提に立ち、「非外来語」がカタカナで表記される理由を探究してきたわけであるが、そもそも「外来語か否か」という語種を基準とした語の区別が、現在の日本語使用者（表記者）においてはどのくらい意識されているのであろうか。カタカナで表記されている非外来語の中には、表記者が「外来語だから（だと思っから）カタカナで書こう」と考えた結果出現した例もあることであろう。また、反対に、「外来語ではないから（ではないと思っから）カタカナ以外で書こう」と考えた結果、カタカナ使用が避けられて漢字やひらがなで出現する語もあるであろう。あるいは、日ごろから表記活動を行う際に「外来語であるか否か」など念頭にない表記者も存在するであろう。いずれにしても、カタカナで表記された語が「外来語か、外来語ではないか」を問われた時、現代

の日本語使用者はどのような判定を下すのかを知りたいと考え、アンケート調査を行った。本稿ではその調査結果を報告する。

## 2. 先行研究と本稿の位置づけ

外来語に関する先行研究は数多く存在する。その一部は、例えば堀切友紀子（2013）に研究動向としてまとめられている。しかし、カタカナという文字による表記と外来語意識<sup>2)</sup>との関連に言及している論者は少ない。そのような中、若者の外来語表記におけるカタカナ使用を語種意識との関わりから論じたのが佐藤栄作（1991）である。佐藤（1991）は、大学生に対する調査の結果を踏まえて、当時の若者に「語種意識の変化—外来語意識の稀薄化」が進行しつつあると指摘し（p.83）、これが「つまりは「外来語（と判定される語）の消失」につながるのではないかと述べている（p.77）<sup>3)</sup>。また、菊地悟（1994）は大学生を対象に調査を行い、カタカナでの表記と外来語意識との関連等を考察した。結果、「カタカナで書く」と「外来語だと思う」にはある程度の相関がある」との結論が提示されている（p.72）。

佐藤（1991）、菊地（1994）はいずれも1990年代に発表された論考であり、それから25年以上が経過している。その後「外来語意識の稀薄化」は進行したのか、また、カタカナで書くことと外来語だと思うことに相関があるという状況は変化したのか、知りたいところである。しかし、それらを追跡できるような研究調査結果は筆者には発見できなかった。そこで、文字種を選択に関わる2種類のアンケート（「日本語の表記に関するアンケート」および「文字化技術者アンケート」）を実施した際に、「カタカナで表記された語を外来語かどうか判定させる」質問をその一部に加えた。「日本語の表記に関するアンケート」は、大学生と社会人を対象に実施したもので、文字種のイメージ（文字情報の受信者として）や、文字種の使い分け（発信者として）に関する意識調査である<sup>4)</sup>。「文字化技術者アンケート」は、音声を文字化する業務に携わる技術者を対象に、文字種選択に関わる意識などを調査したものである。これらの調査の最終的な目的は、非外来語がカタカナで表記される要因をさらに明らかにすることである。

今述べた2種類の調査は外来語意識を調査することが主目的ではないため、外来語か否かの判定調査（以下「外来語判定調査」）で扱ったのは29語というごく少数の語ではある。しかし、現代の日本語使用者における外来語意識の一端を把握することはできるであろう。本稿で報告するのは、この外来語判定調査の結果である。

## 3. カタカナの役割に関する日本語使用者の認識

冒頭で「カタカナの主要な役割は、外来語を表記すること」とであるという前提を述べたが、現代に生きる一般的な日本語使用者<sup>5)</sup>は、カタカナの役割をどのように捉えているのであろうか。つまり、カタカナをどのような語を表記する文字だと見なしているのであろうか。

まず、この「カタカナの主要な役割は、外来語を表記すること」とであるという前提は妥当であると考えられる。文化庁（1991）の指針「外来語の表記」（平成3年6月28日告示）で「「外来

語の表記」に用いる仮名と符号の表」としてカタカナが示されていること、また、これを基に各種マスメディアが表記のよりどころとして定めている表記の手引き類でもカタカナの役割として外来語を筆頭に挙げていることによる。増地（2018）で整理して述べたように、マスメディアや教科書関連の出版社が有する表記の手引き類では、外国人名や地名、外来語を原則としてカタカナで書くことを指針とし、これをカタカナの用法の筆頭に挙げる<sup>6)</sup>。

つまり現代の日本語使用者は、義務教育を受ける期間に教科書を通して外来語がカタカナで書かれることを知り、普段の生活においてはマスメディアを通して非常に多くの〈カタカナで表記された外来語〉に接していることになる。雑誌・新聞・テレビコマーシャルという3つの媒体からカタカナで表記された語を抽出した五十嵐優子（2012）の調査結果によれば、カタカナで表記された総単語数2,929語のうち、外来語は2,667語（91.09%）を占めていたという（p.18）。現在はインターネットもメディアの一つとして加わっているが、インターネットを含む各メディアで外国語由来の語がカタカナで表記され、日々流通していることを考えると、現代の一般的な日本語使用者においては、「外来語はカタカナで書かれている」という共通認識を持っていることが推測される。ただし、その語が外来語であるかどうかという知識が本人にあるか否かは、別の問題である。

そして外来語に加えて、増地（2018）で「カタカナの役割」として整理したように、多くの表記の手引き類ではオノマトペや動植物名にカタカナを用いることを指針として示す。したがって、オノマトペや動植物名がカタカナで表記された用例も一定数流通している。先の五十嵐（2012）の調査で言えば全体の8.91%を構成する一部分に過ぎず、外来語に比べれば数ははるかに少ないものの、それらについても日本語使用者は「カタカナで書かれているのを目にすることがある」という「カタカナ表記存在感覚」（増地2016、p.11）はいだくものと思われる。

以上の実状を踏まえてまとめると、現代に生きる日本語使用者は概して〈カタカナは外来語を表記する文字であり、オノマトペや動植物名を表記する際にも用いられる〉という感覚的な認識を持っているものと考えて差し支えないであろう。

#### 4. 外来語判定調査について

本章ではまず、外来語判定調査の概要と調査協力者の「接触メディア」を示し、続いて調査内容を示す。上述のとおり、この調査は「日本語の表記に関するアンケート」「文字化技術者アンケート」の一部として実施したものであり、本稿が取り上げる調査のみ他の設問とは性質が異なる。以下、本稿が扱う調査のことは「外来語判定調査」あるいは単に「調査」と呼ぶ。元のアンケート全体を総称する際は「アンケート」と言う。

##### 4.1 調査の概要

調査の概要は以下のとおりである<sup>7)</sup>。「日本語の表記に関するアンケート」を調査①、「文字化技術者アンケート」を調査②とする。調査①の学部生以外の協力者は「社会人」と呼ぶ。調査②

の協力者も社会人ではあるが、「技術者」と呼んで区別する。本稿では、これらを単に協力者の「属性」と呼ぶ。調査協力者の年齢は、表1のとおりである。

表1：調査協力者の年齢

年齢	学部生	社会人	技術者	合計
10代	139			139
20代	70	6	1	77
30代		21	19	40
40代		7	22	29
50代		7	16	23
60代			6	6
70代			1	1
合計	209	41	65	315

【調査①】 ・実施時期：2018年7～10月

- ・調査協力者：愛知淑徳大学学部生209名、社会人41名計250名<sup>8)</sup>
- ・教室にて質問紙を配付、あるいは個別に質問紙を渡し、手書きで回答してもらった。

【調査②】 ・実施時期：2020年9月

- ・調査協力者：音声を文字化する作業に従事する技術者（以下「技術者」）65名
- ・音声の文字化を請け負う専門業者に、協力者の選定、アンケートの配付と回収を委託した。アンケート用のフォーマットは、筆者がExcelで作成したものを使用した。

## 4.2 調査協力者の「接触メディア」

調査①②双方のフェイスシートで「接触メディア」について尋ねた。調査①で提示した「接触メディア」に関する質問を、表2として示す。調査②では、表2の選択肢9番の「大学の授業で」を削除し、「その他」を9番とした。また、調査②では複数回答は求めず、「普段、日本語の文字情報を何で見ることが多いか」につき、最も当てはまるものを一つだけ選択させた。

表2：フェイスシートの「接触メディア」に関する質問部分（調査①）

接 触 メ デ ィ ア	日ごろ、日本語の文章やまとまった文字情報を何で見ることが多いですか。（複数回答可） 1. 本・雑誌など（紙の媒体） 2. 新聞（紙） 3. 新聞（Web上） 4. テレビ 5. インターネット（PC） 6. インターネット（タブレット端末） 7. インターネット（携帯電話・スマートフォン） 8. メール・Twitter・LINE など 9. 大学の授業で（配布される資料やPPTなど） 10. その他（ ）
	上で○をつけた接触メディアのうち、1日の中で最も利用時間が長いものはどれですか。番号を記入してください。（回答は一つだけ）（ ）

本研究の調査協力者が、日ごろ日本語の文字情報に最も接触するメディア（以下、単に「接触メディア」）を属性別に集計すると、表3のとおりである。学部生においては「7. インターネット（携帯電話・スマートフォン）」「8. メール・Twitter・LINE など」の合計で83.3%を占める。増地（2020a）の表4・表5から学部生が114名増えたが、増地（2020a）とほぼ同じ結果である。本研究の調査対象者である学部生は、日ごろ、主にインターネット（携帯電話やスマートフォンを利用）やメール・Twitter・LINEなどを通して日本語の文章やまとまった文字情報に接しているということである。社会人においても7番、つまり携帯電話やスマートフォンを通したインターネット利用を選択した回答者が最も多く、41.5%であった。技術者においては5番のPCを通したインターネット利用が35.4%と最も多く、6番の「インターネット（タブレット端末）」を選択した者も12.3%と学部生・社会人に比べて多い。社会人、技術者とも、インターネット上の文字情報に接触する機会が

多いことがわかる。社会人では1番の「本・雑誌など（紙の媒体）」(14.6%)、技術者では2番の「新聞（紙）」(12.3%)を選択した者が各々他の属性に比べて多いのも特徴である。

表3：日本語の文字情報に最も接触するメディア ※「メディア」欄の番号は表2の選択肢に対応。

メディア	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
学部生 (上段は 人数)	9	2	1	9	3	3	95	79	7	1	209
	4.3%	1.0%	0.5%	4.3%	1.4%	1.4%	45.5%	37.8%	3.3%	0.5%	100.0%
社会人 (上段は 人数)	6	1	0	2	8	1	17	4	2	0	41
	14.6%	2.4%	0.0%	4.9%	19.5%	2.4%	41.5%	9.8%	4.9%	0.0%	100.0%
技術者 (上段は 人数)	4	8	2	0	23	8	11	9	0	0	65
	6.2%	12.3%	3.1%	0.0%	35.4%	12.3%	16.9%	13.8%	0.0%	0.0%	100.0%
回答者 全体	19	11	3	11	34	12	123	92	9	1	315
	6.0%	3.5%	1.0%	3.5%	10.8%	3.8%	39.0%	29.2%	2.9%	0.3%	100.0%

### 4.3 調査内容

外来語判定調査の内容は、表4のとおりである。例文中にカタカナで書かれた29語が調査の対象である。文脈から意味が判断しやすいよう、語を単体ではなく文章にして提示した。また、非外来語のカタカナ表記が多用されていても不自然ではない、カジュアルなコンテキストの文章とした<sup>9)</sup>。調査開始前に、これはテストではないこと、したがって正解を求めて辞書等で調べる必要はないことを教示した。

表4：外来語か否かを判定する調査の内容

以下の文章を読んでください。カタカナで書かれた語は、外来語だと思いますか。カタカナで書かれた語を下に書き出してありますので、1・2・3からあなたの気持ちにいちばん近いものを選んで○をつけてください。(文章を丁寧に読む必要はありません)

※「外来語」とは、外国から日本に入ってきた言葉です。通常、カタカナで書かれます。

最近はやケータイを見かけない。3歩あるけばスマホに当たる状況だ。古いモノにも良さがあるのに、などと考えながら駅のトイレから出ようとすると、出口付近にゴミ箱があった。まだキレイな、でも使われた形跡のあるノートと、サビのついたバネが捨てられている。フタを開け、どちらも持ち帰りたい。防犯カメラがないか、辺りを見回す。やはりある。しかし角度から考えて、オレが映るかどうかはビミョーである。こういうときに備え、姿が録画されても身元がバレないコツを伝授してくれたヤツがいる。頭のカツラをズラすのだ。そんなことを考えていたら、横にバラが咲いているのが目に入った。まるでジッとこちらを監視しているようだ。ダメだ。バカらしくなってやめた。もう帰ろう。今日はオクラを買って帰り、エノキとあえて酒の肴にしよう。その前に、ホコリだらけカビだらけのテレビを捨てるのだ。いや、クチコミのサイトで売り飛ばそうか。

1、2、3から一つ選んで○をつける

- |      |           |            |              |
|------|-----------|------------|--------------|
| ケータイ | 1. 外来語である | 2. 外来語ではない | 3. どちらかわからない |
| スマホ  | 1. 外来語である | 2. 外来語ではない | 3. どちらかわからない |

(以下、例文中のカタカナ表記語全てに関して同じ設問が続く)

## 5. 調査結果

29 の調査語を外来語か否かで分類すると次のとおりである。

1. 外来語：スマホ、トイレ、ノート、カメラ、オクラ、テレビ、サイト
2. 非外来語：ケータイ、モノ、ゴミ、キレイ、サビ、バネ、フタ、オレ、ビミョー、バレる、  
コツ、ヤツ、カツラ、ズラす、バラ、ジツ、ダメ、バカ、エノキ、ホコリ、カビ
3. 混種語：クチコミ

混種語の「クチコミ」は「3. どちらかわからない」と回答している場合を「正答」とし、29語のうち何語で正答していたかという正答数ごとの人数を、属性別に表5に示す。

表5：属性別正答数

正答の数	1	8	10	13	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	合計
学部生 (上段は人数)	1	1	0	1	1	4	6	3	6	12	14	17	26	26	31	41	17	2	0	209
	0.5%	0.5%	0.0%	0.5%	0.5%	1.9%	2.9%	1.4%	2.9%	5.7%	6.7%	8.1%	12.4%	12.4%	14.8%	19.6%	8.1%	1.0%	0.0%	100%
社会人 (上段は人数)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	4	7	6	10	6	4	0	41
	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	2.4%	2.4%	9.8%	17.1%	14.6%	24.4%	14.6%	9.8%	0.0%	100%
技術者 (上段は人数)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	2	4	6	22	19	5	2	65
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.1%	0.0%	4.6%	3.1%	6.2%	9.2%	33.8%	29.2%	7.7%	3.1%	100%
回答者 全体	1	1	1	1	1	4	6	3	6	15	15	21	32	37	43	73	42	11	2	315
	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	1.3%	1.9%	1.0%	1.9%	4.8%	4.8%	6.7%	10.2%	11.7%	13.7%	23.2%	13.3%	3.5%	0.6%	100%

29語全てで正答した回答者が2名おり、2名共に技術者である。正答数と接触メディアとの関連を確認すると、この2名が表3の文字情報に最も接触するメディアとして回答したのは、いずれも5番の「インターネット(PC)」であった。28語で正答した回答者11名の接触メディアは、1・2・7・8番が各2名、4・5・6番が各1名であった。最頻値である正答数26の73名が回答した接触メディア上位3種は、7番23名(31.5%)、8番20名(27.4%)、5番11名(15.1%)であった。正答数が半分以下(14以下)であった回答者4名の接触メディアは、7番が2名、6・8番が各1名であった。

属性別の3群で正答数の平均値を算出すると、学部生は23.24 ( $SD = 3.443$ )、社会人は24.80 ( $SD = 3.027$ )、技術者は25.86 ( $SD = 1.836$ )であった。正答数を従属変数、属性を独立変数とした一元配置の分散分析を行った結果、正答数に対して属性の有意な効果が見られた( $F(2, 312) = 19.073, p < .001$ )。引き続きHSD法で群間の多重比較を行ったところ、社会人と技術者は各々、学部生よりも有意に正答数の平均値が高いことがわかった。社会人と技術者の間には有意差は見られなかった。そこで以下では、社会人と技術者をまとめて「社会人2」と称し、「学部生」と「社会人2」における外来語判定の結果を見ていく。

29の調査語ごとに、「1. 外来語である」「2. 外来語ではない」「3. どちらかわからない」と答えた人数を学部生・社会人2別に示す。表6に外来語、表7には非外来語と混種語をまとめた。無回答による欠損値があるため、人数の合計が314名以下の語がある。表の右側には、学部生と社会人2別の正答率を示した。正答率に差があるかどうか、フィッシャーの直接確率を求めた結果を正答率の右側に記号で示す。

なお、「社会人2」を構成する社会人と技術者の正答率に差があるかどうかについても、各語別

にフィッシャーの直接確率を求めた。その結果、「ノート」( $p = .072$ )、「バラ」( $p = .072$ )、「ジツ」( $p = .053$ )で有意な傾向が見られたものの、その他の語では有意差はなかった。外来語の「トイレ」「オクラ」「テレビ」、非外来語の「ケータイ」「モノ」「ゴミ」「キレイ」「ビミョー」「バレル」「バカ」においては、社会人と技術者の正答率がほぼ一致していた（「ビミョー」は100%一致）。文字化の業務に携わっている技術者であることは、「社会人」という属性の中にあつては正答率にほとんど影響を及ぼさないようである。また、技術者65名を年代ごとに3分割して（20代+30代:20名、40代:22名、50代+60代+70代:23名）正答率に差があるかどうかを見たが、正答率の平均は3群間でほぼ等しく、有意差はなかった。

その他、いくつかの観点から調査結果を分析していく。まず、正答数が27・28と高い回答者53名はどの語の判定を誤ったのかという点について見る。正答数28の回答者11名は、「オクラ」か「クチコミ」いずれかの判定に誤りがあった。3名が「オクラ」を、8名が「クチコミ」を非外来語と判定していた。正答数27の回答者42名に関しては、「オクラ」と「クチコミ」を非外来語と判定した回答者が26名、〈「オクラ」は「どちらかわからない」、「クチコミ」は非外来語〉とした回答者が2名おり、その他の回答者のほとんどは〈「オクラ」あるいは「クチコミ」と、ほかの1語〉の計2語が正答ではなかった。ほかの1語とは、外来語と判定された「オレ」「バラ」「エノキ」、また、「どちらかわからない」とされた「バネ」「バレル」である。

次に、表6で正答率が低かった語について見る。「オクラ」の正答率が低くなるであろうことは、調査開始時点で予測していた（後述）。しかし、「スマホ」「トイレ」の正答率の低さは予想外であった。「スマホ」について「2. 外来語ではない」または「3. どちらかわからない」を選択した回答者合計128名の属性は、表6にあるとおり学部生88名、社会人2が40名で、学部生と社会人2の正答率に有意差はない。128名の年齢を確認すると、10代:56名、20代:36名、30代:18名、40代:11名、50代:4名、60代:2名、70代:1名であった。なお、「社会人2」40名の内訳は、社会人18名、技術者22名である。

表6：外来語判定調査結果（外来語）

スマホ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率	オクラ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	121	76	12	209	57.9%	学部生	40	151	18	209	19.1%**
社会人2	66	36	4	106	62.3%	社会人2	36	52	18	106	34.0%**
合計	187	112	16	315	59.4%	合計	76	203	36	315	24.1%
トイレ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率	テレビ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	146	55	8	209	69.9%*	学部生	174	28	7	209	83.3%
社会人2	88	16	2	106	83.0%*	社会人2	95	8	3	106	89.6%
合計	234	71	10	315	74.3%	合計	269	36	10	315	85.4%
ノート	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率	サイト	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	181	21	6	208	87.0%*	学部生	192	10	7	209	91.9%
社会人2	101	3	2	106	95.3%*	社会人2	102	3	1	106	96.2%
合計	282	24	8	314	89.8%	合計	294	13	8	315	93.3%
カメラ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率	** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$					
学部生	192	14	3	209	91.9%†						
社会人2	103	2	1	106	97.2%†						
合計	295	16	4	315	93.7%						

表7：外来語判定調査結果（非外来語・混種語）

非外来語

ケータイ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	16	188	5	209	90.0% **
社会人2	1	105	0	106	99.1% **
合計	17	293	5	315	93.0%

ヤツ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	4	199	6	209	95.2%
社会人2	0	105	1	106	99.1%
合計	4	304	7	315	96.5%

モノ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	3	196	10	209	93.8%
社会人2	0	104	2	106	98.1%
合計	3	300	12	315	95.2%

カツラ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	13	179	17	209	85.6% **
社会人2	1	102	3	106	96.2% **
合計	14	281	20	315	89.2%

ゴミ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	24	170	15	209	81.3% ***
社会人2	2	101	3	106	95.3% ***
合計	26	271	18	315	86.0%

ズラす	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	1	196	12	209	93.8% †
社会人2	1	104	1	106	98.1% †
合計	2	300	13	315	95.2%

キレイ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	4	197	8	209	94.3% †
社会人2	1	105	0	106	99.1% †
合計	5	302	8	315	95.9%

バラ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	63	134	10	207	64.7% **
社会人2	16	87	3	106	82.1% **
合計	79	221	13	313	70.6%

サビ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	24	168	17	209	80.4% *
社会人2	5	97	4	106	91.5% *
合計	29	265	21	315	84.1%

ジツ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	11	172	26	209	82.3% *
社会人2	1	98	7	106	92.5% *
合計	12	270	33	315	85.7%

バネ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	60	131	18	209	62.7%
社会人2	12	76	18	106	71.7%
合計	72	207	36	315	65.7%

ダメ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	7	190	11	208	91.3% **
社会人2	0	105	1	106	99.1% **
合計	7	295	12	314	93.9%

フタ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	3	200	6	209	95.7%
社会人2	0	105	1	106	99.1%
合計	3	305	7	315	96.8%

バカ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	8	190	11	209	90.9% *
社会人2	1	104	1	106	98.1% *
合計	9	294	12	315	93.3%

オレ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	7	193	9	209	92.3% *
社会人2	1	104	1	106	98.1% *
合計	8	297	10	315	94.3%

エノキ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	23	163	23	209	78.0% †
社会人2	7	92	7	106	86.8% †
合計	30	255	30	315	81.0%

ビヨー	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	1	204	4	209	97.6%
社会人2	0	106	0	106	100.0%
合計	1	310	4	315	98.4%

ホコリ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	7	192	10	209	91.9%
社会人2	2	101	3	106	95.3%
合計	9	293	13	315	93.0%

バレる	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	9	176	24	209	84.2% *
社会人2	1	98	7	106	92.5% *
合計	10	274	31	315	87.0%

カビ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	14	177	18	209	84.7%
社会人2	4	95	7	106	89.6%
合計	18	272	25	315	86.3%

コツ	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
学部生	11	183	15	209	87.6%
社会人2	1	99	6	106	93.4%
合計	12	282	21	315	89.5%

混種語	1.外来語	2.非外来語	3.不明	合計	正答率
クチコミ					
学部生	22	176	11	209	5.3% *
社会人2	6	86	14	106	13.2% **
合計	28	262	25	315	8.9%

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  †  $p < .10$



同様に「トイレ」について2または3を選択した回答者81名の属性は、学部生63名、社会人2が18名である(表6)。年齢を確認すると、10代:41名、20代:23名、30代:6名、40代:6名、50代:2名、60代:2名、70代:1名であった。学部生と社会人2の正答率に有意差が認められ、学部生の正答率が有意に低い(フィッシャーの直接確率 $p = .014$ )。「社会人2」の内訳は、社会人7名、技術者11名である。

表6には表れていないが、「スマホ」「トイレ」共に非外来語と判定して2または3を選択した者の数を調べたところ、56名いた。その属性は学部生41名、社会人6名、技術者9名である。年齢は10代:25名、20代:17名、30代:4名、40代:6名、50代:2名、60代:1名、70代:1名であった。

最後に、表7で正答率の低い「バネ」と「バラ」に焦点を当てる。両者には「バ」から始まるという共通点があるため、同一人物であれば「バネ」「バラ」に対して同じ回答をするのかどうかを精査した。つまり、〈いずれも外来語(回答の選択肢1)と判定〉、あるいは〈いずれも外来語以外(回答の選択肢2または3)と判定〉するという傾向が認められるか否かということである。表7では「バネ」を非外来語とした者は207名、「バラ」を非外来語とした者は221名といずれも200名を超えているが、双方の回答者は重なっているのであろうか。集計結果は表8のとおりである。「バネ」「バラ」ともに非外来語と判定し、正答であった回答者は165名(回答者全体の52.4%)であった。「バネ」のみ非外来語とした回答者は41名、「バラ」のみ非外来語とした回答者は56名で、97名は「バネ」と「バラ」に対して異なる判定をした。表8でどちらも「×」である51名のうち、いずれも外来語とした回答者は35名であった。残る16名は、一方を外来語、他方を「どちらかわからない」と回答した。

なお、29語全てが外来語であると判定した回答者も、全てが非外来語であるとした回答者も、一人もいなかった。そして、どの語で正答しているかは、極めて個別的であった。

表8:「バネ」と「バラ」の回答

バネ	○	○	×	×	いずれかが無回答
バラ	○	×	○	×	
人数	165	41	56	51	2

○=非外来語と判定

×=外来語または「どちらかわからない」と判定

## 6. 考察

まず全体的な傾向に関して述べる。今回調査語とした全ての語において、学部生の正答率が社会人のそれよりも低かった。外来語を判定した表6の結果からは、若い世代において外来語意識の稀薄化がより進んでいることがわかる。表7の非外来語と混種語の判定結果にも、社会人よりも学部生のほうが語の出自の判定が曖昧である様子が表れている。

### 6-1. 表6「外来語」判定の結果より

調査対象語を個別に見ていくと、表6ではまず「オクラ」の正答率の低さ、つまり非外来語と判定した者の多さが目立つ。「オクラ」は佐藤(1991)の調査結果でも「洋語と答えた者はほとんどいない」(p.78)との報告があり、「洋風でないから」という理由を複数得ている」(p.86)と

のことであったため、正答率の低さは予想していた。佐藤（1991）で述べられている「語音が和語的である」ことが、2020年現在でも非外来語と判定される一因となっているのであろう。動植物名は和語の場合でもカタカナ表記が多く流通しているため、「日本の言葉だがカタカナで表記されている」と感覚的に捉えられてもいるのだろう。本稿の調査では学部生と社会人2の正答率に有意差があるが、佐藤（1991）の調査当時の大学生は、現在は「社会人2」を構成する50歳前後になっているはずである。1991年当時の大学生よりも2020年頃の大学生において、さらに「オクラ」に対する外来語意識が薄れてきているとも解釈できる。

「オクラ」はともかくとして、すでに述べたように「スマホ」「トイレ」の正答率の低さは予想外であった。「スマホ」は全体での正答率が59.4%で、112名（35.6%）の回答者が「外来語ではない」と判定した。そして、学部生と社会人2の正答率に有意差がない。つまり、世代を問わず、「外来語ではない」と認識する者がかなりの数に上る。佐藤（1991）では個人における外来語判定に関わる8つの条件が挙げられ、そのうち1つないしはいくつかを満たさない時、その語は「外来語」でありながら個人のレベルでは「外来語」ではなくなる場合がある」とされている。そしてその条件の1つに、「対応する和語・漢語の類義語・同義語が存在する」というものがある（p.77）。「スマホ」は確かにこの条件を満たしてはいない。それでも、スマートフォンという以前は存在しなかった機器の登場とともに世に出た新しい語であり、「スマートフォンの略である」という認識があつてそれに思い至れば、「外来語なのではないか」と考えてもよさそうなものである。新しい外来語が増加し続けている現在、「以前から存在しており、日本語の語彙として定着した語は今回の調査で非外来語と認識された」と考えることもでき、「トイレ」ならばその例に当たるであろうが「スマホ」は該当しない。

「トイレ」に関しては、特に学部生の世代では「便所」を日常生活で見聞きする機会が激減していると考えられ、「お手洗い」は丁寧で使用場面が異なる。したがって、先述の「対応する和語・漢語の類義語・同義語が存在する」という条件を最早満たさないとも言える。「スマホ」と同様である。かつては「ハバカリやお手洗いよりもトイレのほうが設備がよさそうに聞こえる」（魚返善雄 1960、p.27）と言われた頃もあつたが、そうした時代は終わりを告げたということであろう。

「トイレ」「スマホ」ともに学部生の正答率が低いのは、どちらも日常生活上の必需品であり、なければ生きていけないほどに<sup>11)</sup>自身の生きる営みに密着しており、目新しさがなくなっていることも理由の一つなのであろうかと飛躍して考えたい。「ノート」の正答率に社会人2と学部生の間で有意差があるのも、トイレ同様「帳面」という語が一般的ではなくなったことが学部生の非外来語判定者を生んでいるのであろうか。ただし、「ノート」は、「スマホ」「トイレ」ほど大学生の日常生活に密着しているとは言いがたい。昨今の大学生はスマホでメモを取り、スマホでレポートを書く。その様子を見ていると字を手書きする機会は激減しており、そのうちノートという物品自体が淘汰されるのではないかとの危機感も覚える。仮にそのような事態になれば、「ノート」も死語となる。

「カメラ」「サイト」は調査語の中では正答率が高いが、「テレビ」になると正答率が低下する。

つまり、非外来語と判定する人数が少し増加する。「テレビ」は、朝日新聞の1911年から2005年までの社説から外来語を抽出した橋本和佳(2010)の調査において高頻度語彙の12位(p.48)にランクインするほど頻繁に用いられてきている。日常生活に密着した物品の名称であり、金愛蘭(2012)でも基本語化したと考えられる語の一つとして例示されている。本稿の接触メディアに関する調査では「テレビ」との回答は少なかったが、これは本稿の設問が「日本語の文字情報を何で見ることが多いか」という「文字情報」に限定した問いであるためであろう。文化庁(2015)の「平成27年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」によれば、毎日の生活に必要な情報を得るためにテレビを利用しているという回答が、85.9%で最も高かったとのことである(p.9)。「スマホ」「トイレ」同様、生活との密着度と、対応する和語・漢語の不在状況とが、「テレビ」を外来語と認識させることを阻みつつあるのかもしれない。

「スマホ」「トイレ」「テレビ」の3語には別の共通点がある。語形が原語の原形をとどめていない縮約形であるという点である。回答者である学部生の一人と、本稿の調査後に話をする機会があった。その学生は正答数は23で平均的であったが、外来語は外来語と判定できていたため、どのように判定したのかを尋ねてみた。すると、「英語にできるかどうかで判断した。しかし、「トイレ」のように元の語と異なるものは迷った」とのことであった。「英語にできるかどうか」というのは、妥当な判定方法である。推測であるが、これらの3語を非外来語とした回答者の中には、英単語に変換しようとしたものの原形に復元できず、「外来語ではない」との判定につながったケースも存在したのかもしれない。また、このような原形と異なる語を「カメラ」などと同じ外来語と判定してよいのかどうか、迷ったケースもあるのかもしれない。これは「外来語」の定義をどう認識しているかに関わる問題である。もちろん、元の原語に遡って考えるという発想自体無い回答者も存在するであろう。いずれにしても、「スマホ」「トイレ」を外来語と判定しない正答率の低さからは、〈カタカナで表記されていることと、その語を外来語と見なすこと〉との結びつきが弱い日本語使用者が一定数存在することがわかる。言い換えると、ある語が外国由来の語であるかどうかの判定は、カタカナ表記という文字種を判断基準として行われるわけでは必ずしもないということになる。

## 6-2. 表7「非外来語」「混種語」判定の結果より

表7については、「バネ」と「バラ」の正答率が低い。「バラ」は笹原宏之(2007)で「外来語のような響きを持つが、純粋な和語である」と述べられ、語頭が濁音であることが「外来語のような響き」につながっていることが示唆されている(p.57)。この条件は「バネ」にも当てはまる。したがって、「バネ」「バラ」はその外国から来た言葉のような響きが外来語判定につながったとの解釈がまず成り立つ。しかし、5章で述べたとおり、「バラ」を外来語と判定した回答者の全員が「バネ」を外来語と判定したわけではない。さらに、今回の調査語の中には「バレる」「バカ」もある。「バレる」「バカ」ともに、社会人2では非外来語と判定した正答者が9割を超えた。「バカ」では98.1%に上る。学部生においても、社会人よりは正答率は低いものの、「バレる」では

84.2%、「バカ」では90.9%が非外来語と判定している。つまり、語頭が「バ」の音であれば全ての語がただちに外来語と判定されるわけでもない。「バラ」については、笹原（2007）で「バラ自体が外来の、西欧の香り漂う花の女王としてのイメージを帯びている」（p.57）とも述べられており、語のイメージと語音とが相まって「外来語」との判定につながるのであろう。社会人と学部生の正答率に有意差があり、特に学部生で正答率が低いのは、かつてテレビで流れた「薔薇って漢字で書ける？」というCM<sup>12)</sup>を知らない世代だからであろうか。もし「薔薇」という漢字表記が存在すること自体認識していなければ、その回答者にとって「バラ」は、先に述べた佐藤（1991）で提示された条件の一つである「ヒラガナ表記・漢字表記されることがない」という条件を満たすことになるからである<sup>13)</sup>。「バネ」についても、矢田勉（2013）で「漢字表記がやや難しいか、結合度の弱い」ことがカタカナ表記される要因の一つである例として挙げられている（p.88）。外来語と判定される一因であろう。

「ゴミ」では学部生と社会人2の間で正答率に顕著な差が見られた。若い世代で、外来語ではないという意識が稀薄になりつつあるようである。「ゴミ」は「バネ」「バラ」同様濁音から始まる語であり、「ゴム」と語形が似ているとも言える。また、「ゴミ」は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍テキストデータを調査対象とした柏野和佳子（2014）において、カタカナ表記で使用される頻度が高い上位5番目の語として報告されている（p.95）。合計使用頻度に占めるカタカナ表記の比率は81.9%、ひらがな表記は18.0%、漢字表記は0.2%であったとのことである。筆者の内省によっても、「ゴミ」はカタカナ表記、ひらがな表記のいずれも一定数流通しているものの、カタカナがより多く使用されているように思われる。「バネ」「バラ」同様、「ヒラガナ表記・漢字表記されることがない」と認識され、外来語との判定につながっても不思議ではない状況である。学部生において外来語と判定する回答者が多い結果は、先の「スマホ」「トイレ」と合わせて考えると、カタカナで表記されているかどうかではなく、語形やその他の要素によって外来語か否かを判定している若い世代が一定数存在することを示す。

最後に混種語の「クチコミ」についてである。非外来語と判定した回答者が262人（83.2%）いた。「コミ」が「コミュニケーション」の略であるという意識が稀薄になっているのであろう。語の意味からは「口込み」と解釈することもでき、語形、語感ともに日本語的であることから、外来語ではないという判定につながったのであろう。

表7のほとんどの語は非外来語との判定がされており、正答率が高い。先に述べた矢田（2013）では「フタ」が「バネ」と並んで例示されているが、本稿の調査においては、「バネ」とは異なり「フタ」については非外来語とする正答率が非常に高かった。ここでも、「カタカナで書かれている語は外来語である」と短絡的に多くの人が捉えているわけではないことがわかる。また、カタカナで表記されていることが、外来語か否かの判定時に考慮される要素の全てではないことがこれによっても示唆される。

### 6-3. 外来語意識の稀薄化は進んだのか

本稿の調査結果を踏まえると、10代・20代の若い世代では外来語意識の稀薄化（佐藤1991）

が進み、佐藤（1991）が予言した「外来語（と判定される語）の消失」にまた少し近づいたように思われる。中高年者と大学生のカタカナ語の使用傾向を調査した杉島一郎（2005）は、20代の若い世代は、カタカナ語があふれた中で生活してきたことでカタカナ語が日本語の一部として定着し、当たり前のものであるとして使っている可能性があるとして推測している（p.49）。杉島（2005）の調査時からさらに15年ほど経過し、「スマホ」や「トイレ」さえ外来語ではないと認識されるほどに、「いかにもカタカナ語」といった姿をしていない場合は外来語と判定されにくくなっていくようである。菊地（1994）で言及されていた、「カタカナで書く」と「外来語だと思う」とこととの相関についても、本稿で述べてきたとおり、全体的な傾向として相関が弱くなってきていると見てよいであろう。先述したとおり、2015年の国語に関する世論調査では、情報源としてテレビが多く利用されることが明らかになっている（文化庁2015）。増地（2015）で示したテレビCMの文字情報における字種比率では、ローマ字（Alphabetと同義）が21.2%を占めており、漢字（23.2%）、ひらがな（21.4%）、カタカナ（21.9%）とほぼ同じ割合であった（p.16）。Alphabetで書かれた語を目にすることが増え、「Alphabet表記こそが外来語」との見方が台頭しつつあるのかもしれない。

学部生以外についても、本稿の調査結果では技術者とそれ以外の社会人とで正答率にはほとんど差がない。音声文字化技術者は、「規範的な表記」というものに対して、より意識的であるはずである。それにもかかわらず正答率に差がないことから、表記から語種を判断し、また、語種との対応で表記を決めるという表記選択のシステムを彼らが採用していない（自分の内に持っていない）ことがうかがえる。

たとえ「定着途上」にあるカタカナ語であっても和語・漢語よりは「カタカナ語の方が分かる」という世代が確実に育ってきていると2003年に述べたのは関根健一（2003）であるが、それから17年経過し、関根（2003）が述べるころの若い世代はすでに30代に入っている。カタカナ語への抵抗感の低下となじみが、〈カタカナと外来語の非対応〉と〈外来語意識の稀薄化〉を生じさせた。これにより、「カタカナがあるために、日本人はどの単語が外来語であるか簡単にわかる」（金田一春彦1988、p.11）とは言い切れない時代を迎えているのである。

## 7. おわりに

本稿の調査には、調査語の数が少なく、調査語自体にも偏りがあるなどの問題点が存する。しかしながらその調査結果は、現代の日本語使用者における外来語意識の一端を事実として表してはいる。以下の反省を今後活かしていきたい。

まず、「外来語」の定義に関してである。アンケートの設問には「外来語」の説明も添えたのであるが、「外国から日本に入ってきた言葉」の解釈に回答者によるブレが生じた可能性もある。一般的な日本語使用者においては、成田徹男・榊原浩之（2004）が指摘するように、表記する側の人間が語種を明確に意識しているわけではない（p.52）。さらに、「カタカナが外来語を書くために主に使用される」という意識も稀薄である可能性が本稿の調査結果からは示唆される。「カタカ

ナは何に使う文字だと思うか」等の質問も、調査項目とすべきであった。

調査語の選定に関しては、反省点が多々ある。日常的で使用頻度が高く、なじみのありそうな語を選んだのであるが、それが仇になった。調査語とした外来語は、全て3拍の具体的な事物を指す名詞である。例えば文化庁(2017)の「V 外来語についての意識」に挙げられている「コンソーシアム」「インバウンド」(p.10)など、抽象的でいかにも外国由来の雰囲気を感じた語や、「ヴィ」を表記上含む語、「ダイバーシティ」「プロパガンダ」「コンプライアンス」といったような発音した時にいかにも外国語らしい響きを持つ語も調査語とし、それらの正答率も確認すべきであったろう。さらには「ケース」「トラブル」などの抽象的かつ基本語化したと考えられる(金愛蘭2012)語も加えるべきであった。

最後に、田崎峯男(1999)の「カタカナ語の文化的諸相」から一文(p.69)を引用し、本稿の締めくくりとする。

「よきにつけ悪しきにつけ、カタカナ語はその時代を語り、映していると言ってもよいだろう。」

## 注

- 1) 例えば、故天野祐吉氏はかつて国立国語研究所の座談会において「基本的に広告というのは、何か商品やサービスについて、これは新しいものだ、珍しいものだというイメージをくっつけようとするのですが、そのときに外来語を使うことが多いんですね」と語っていた。ただし、続けて「最近は広告の受け手の感覚が成熟してきたので、外来語＝新しいというイメージはなくなってきている」とし、90年代くらいからは和語の方が主流になってきているようだと述べていた(国立国語研究所編2006、pp.12-13)。外来語の肯定的なイメージについては、堀切友紀子(2013)が先行研究を整理して提示している(p.117)。
- 2) 本稿における「外来語意識」は、「ある語が外来語であるという認識」と定義する。
- 3) そのおよそ30年前には、魚返善雄(1960)が今後は「外来語と(せまい意味の)カタカナ語の区別がつかかねる場合も起こる」と予言している(p.29)。せまい意味のカタカナ語とは、カタカナで表記された非外来語のことである。
- 4) その調査結果の一部を、増地(2020a・2020b)ほかで報告した。
- 5) 2章で述べた「文字化技術者アンケート」の回答者である技術者は、3章で述べる表記の手引き類を使用して文字化の業務に従事している。そのため、そのような業務に従事していない日本語使用者に比べ、カタカナの役割が明確に認識されているものと考えられる。本稿ではまず、日常的に表記の手引き類を使用する職にある日本語使用者と、そうではない日本語使用者とを分けて考える。本稿で調査対象とした文字化技術者を前者の代表として「技術者」と呼ぶ。ここでの「一般的な日本語使用者」が指しているのは後者である。
- 6) 例えば、共同通信社(2016)109ページ、【片仮名使用】欄。
- 7) 本調査は愛知淑徳大学人間情報学部倫理審査委員会の承認(2018-007)を受けて実施した。
- 8) 社会人は、愛知淑徳大学の教職員を中心に筆者の知人等である。

- 9) コンテキストと非外来語のカタカナ表記の関係については、増地（2013）を参照されたい。
- 10) この調査内容については増地（2020b）を参照されたい。
- 11) 実際、「スマホがないと生きていけない」と話す大学生が存在する。
- 12) 笹原（2007）でもこのCMに関して言及されている（pp.56-57）。筆者の母がこのCMに触発されて漢字の猛勉強を始めたこともあって、筆者はこのCMを非常によく覚えている。
- 13) 佐藤（1991）で提示された8つの条件は、裏を返せば「外来語と判定される条件」である。柏野和佳子・中村壮範（2013）による語の表記の調査結果では、「ばら」という語のひらがな表記率は4.2%であり、カタカナの72.5%、漢字の23.3%に比べて極端に少ない（p.287）。「バラはひらがなで表記されない」という一般的な認識につながっても不思議ではない。

## 文献

- 五十嵐優子（2012）「日本の社会とカタカナ表記」『Mukogawa literary review』49、pp.15-25
- 魚返善雄（1960）「漢語にかわるカタカナ語（特集・外国語のはんらん）」『言語生活』103、筑摩書房、pp.26-32
- 柏野和佳子（2014）「「コーパス」でさぐる和語や漢語のカタカナ表記の実態」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』高田智和・横山詔一編、彩流社、pp.86-105
- 柏野和佳子・中村壮範（2013）「現代日本語書き言葉における非外来語のカタカナ表記事情」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所、pp.285-290
- 菊地悟（1994）「大学生の外来語意識(1)－イメージ・表記・語種意識の調査から」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』4、pp.61-73
- 金愛蘭（2012）「日本語の攻防【語彙】日本語の基本語彙に入り込む外来語」『日本語学』31(3)、明治書院、pp.78-91
- 共同通信社（2016）『記者ハンドブック第13版』共同通信社
- 金田一春彦（1988）『日本語（下）』岩波書店
- 国立国語研究所編（2006）「座談会 外来語と現代社会」『新「ことば」シリーズ19 外来語と現代社会』国立印刷局、pp.9-25
- 笹原宏之（2007）「日本語の文字の表現性－「薔薇」を巡って（特集 東アジアの文字文化－表現する文字、創造される文字）」『言語』36(10)、大修館書店、pp.56-63
- 佐藤栄作（1991）「若者のカタカナ使用と外来語表記－語種意識から」『日本語学』10(7)、明治書院、pp.76-88
- 杉島一郎（2005）「カタカナ語の使用における中高年者と大学生の比較」『仁愛大学研究紀要』4、pp.45-56
- 関根健一（2003）「新聞記事の中のカタカナ語（特集 いまカタカナことばを考える）」『日本語学』22(8)、明治書院、pp.30-39
- 田崎峯男（1999）「カタカナ語の文化的諸相」『現代社会学』1、pp.55-72

- 成田徹男・榊原浩之 (2004) 「現代日本語の表記体系と表記戦略—カタカナの使い方の変化」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』2、pp.41-55
- 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
- 文化庁 (1991) 「外来語の表記」 [https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/gairai/index.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/gairai/index.html) (2020年8月23日閲覧)
- 文化庁 (2015) 「平成27年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」 [https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/kokugo\\_yoronchosa/pdf/h27\\_chosa\\_kekka.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h27_chosa_kekka.pdf) (2020年10月23日閲覧)
- 文化庁 (2017) 「平成29年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」 URL 同上 /r1393038\_01.pdf (2020年10月23日閲覧)
- 堀切友紀子 (2013) 「外来語に関する研究動向—使用意識と言語接触の視点から」『お茶の水女子大学 人文科学研究』9、pp.113-124
- 増地ひとみ (2013) 「テレビ番組の文字情報における文字種の選択—番組のジャンルと語用論的要素に注目して」『早稲田日本語研究』22、pp.24-35
- 増地ひとみ (2015) 「テレビCMの文字情報における文字種の選択—CMのジャンルと語用論的要素に注目して」『早稲田日本語研究』24、pp.13-24
- 増地ひとみ (2016) 「日用品のパッケージにおける非標準的なカタカナ表記—表記の「流通」を中心に」『早稲田日本語研究』25、pp.1-14
- 増地ひとみ (2018) 「学術雑誌におけるカタカナの役割と使用実態—カタカナ表記で出現する語とコンテキストとの関連」『国文学研究』184、pp.1-15 (pp.105-91)
- 増地ひとみ (2019) 「「非外来語のカタカナ表記」研究の現状と今後の展望」『愛知淑徳大学論集 文学部篇』44、pp.143-159
- 増地ひとみ (2020a) 「「政治とカネ」の「カネ」とはどのような金銭であるのか—「カネ」と「金」表記の印象に関するアンケート調査結果から」『愛知淑徳大学論集 創造表現学部篇』10、pp.35-50
- 増地ひとみ (2020b) 「大学生の文字生活と文字種意識に関するアンケート調査結果」『日本漢字學會報』2、pp.145-159
- 矢田勉 (2013) 「日本語の攻防【文字・表記】カタカナとひらがな」『日本語学』32(12)、明治書院、pp.82-91

## 付記

本稿は、愛知淑徳大学の特定課題研究助成「非外来語のカタカナ表記に関する意識調査」(平成30年度)、「表記の手引き」類に準拠したテキストにおける表記のゆれの実態調査(2020年度)の成果の一部である。